オーウェン・ジョーンズの装飾の文法

石倉和佳

1. はじめに

オーウェン・ジョーンズ（1809-1874）はヴィクトリア朝を代表する建築家であり、建築物の装飾、書籍や商業印刷におけるデザイナーとして活動した。現代において、彼はその主著である『装飾の文法』（*Grammar of Ornament*, 1856）によって主に知られており、この書籍の趣旨について作家のジョージ・エリオット（George Eliot, [Mary Ann Evans], 1819-1880）は、デザインの事例を並べたものではなくデザインに関する原理の応用を示したものだと説明している。彼女は、「［多色刷りの］図版は構造的文脈と対応した事例であり、オウムのように繰り返されるものではなく、構造的原理からの具体的表現として研究されるべきものである」（“The plates correspond to examples in syntax, not to be repeated parrot-like, but to be studied as embodiments of syntactical principles.” Eliot *Essays*, 274）と、ジョーンズのいう装飾の原理を文構造の比喩で述べた[1]。本論では装飾の文法を、エリオットに倣い装飾における構造的原理（syntax）を明らかにするものとして捉える。以下ではまずジョーンズの業績と評価の変遷について概観し、次にジョーンズの研究において省略されることの多いウェールズ出身の彼の父を通して、彼の家族と生い立ちについて整理する。そして『装飾の文法』でジョーンズが示した「一般原理」（“GENERAL PRINCIPLES”）の内容について若干の検討を行い、彼が多色刷り印刷によって制作した各種文様を通して、どのような装飾の展開を考えていたのかについて、平面充填を事例として考察していきたい。

Owen Jones, c.1869
The Builder, May 9, 1874, 383

2. オーウェン・ジョーンズ：建築と装飾

オーウェン・ジョーンズの『装飾の文法』は、当時としては最も先進的な石板多色刷り印刷によって制作された。彼が印刷技術の革新を行うべく工房を作り研究を重ねるまでになったのは、1830 年代にギリシャを経てエジプトからスペインへと測量やデッサンを行いながら旅行をしたことが端緒となっている。ギリシャで出会ったフランス人ジュール・グーリー（Jules Goury, 1803-1834）とともに、彼らはトルコにしばらく滞在したあとエジプトに向かい、その後スペインのアルハンブラ宮殿に 6 か月滞在して調査した。この調査はグーリーのコレラによる死によって中断したが、ジョーンズはその後アルハンブラ宮殿の紹介を石板多色刷り印刷による建築画とともに掲載した書籍（*Plans, Elevations, Sections and Details of the Alhambra*, 1836-1842）を二人の共著として出版した。この書籍はヨーロッパにおけるイスラム建築と装飾への関心を高めたとされているが、当時としては最も先進的な彩色画のついた出版物として上梓できたのは、アルハンブラを再訪し、多色刷り印刷の精度を高めるために独立した工房を作って研究を重ねたジョーンズの努力と奮闘の賜物だったと言える。

アルハンブラ宮殿に関する書籍の出版とその評価によって、彼には室内装飾の仕事と彩色印刷のデザインの仕事が拓かれることになった。これに加えて、1851 年に開催されたロンドン万国博覧会において、展示場となった水晶宮（Crystal Palace）に作られたエジプト館（Egyptian Hall）などの展示室の内装デザインを行った。ロンドンにおける工芸美術のコレクションは、博覧会後の 1852 年に設立された工業製品博物館（Museum of Manufactures）に収蔵され、この博物館は翌年の装飾工芸博物館（Museum of Ornamental Art）への名称変更を経て、1857 年からはサウス・ケンジントン博物館（South Kensington Museum, 1899 年からは Victoria & Albert Museum）となった[2]。これらの博物館の収蔵品のカタログ化や解説などにもジョーンズは関わったと言われるが、カタログには工芸制作のスキルを習得する際の原理を把握することの重要性が記載されており、『装飾の文法』における一般原理を重視する姿勢と共通している[3]。彼は工芸品や工業製品の収集や技能指導を行い、その際に『装飾の文法』はテキストとして使われた。ジョーンズは、イスラム建築とその装飾デザインをイギリスに紹介したことをきっかけとして、ロンドン万博開催を起点とするイギリスにおける工芸美術や産業育成への社会的関心のうねりの中に身を置くことになった。彼はいわ

ば時代によって見出された人であったのである。

ジョーンズが亡くなった年にロンドンの建築雑誌『ザ・ビルダー』(*The Builder*)に掲載された匿名の追悼記事がある。おそらくジョーンズの若いころからの知己であったと考えられる筆者は、次のように始める。

> オーウェン・ジョーンズの 65 歳でのまだ早い死を我々は悼むのであるが、彼は建築が隆盛となる英国において、最も強力な色彩の使徒であった。彼が骨を折って行った仕事がどれほどあるか、そして彼が作った作品の多さについて、そうしたことに詳しいと思っている人々にとってさえ知られていない。
>
> OWEN JONES, whose death, at the comparatively early age of 65, all must mourn, was the most potent apostle of colour that architectural England has had in these days. The extent of his labours, and the amount of work he did, are scarcely known, even to those who consider themselves well informed on such subjects. (*The Builder*, 383, May 9 1874)

彼は最晩年は病に苦しんだともいわれ、その生涯は才能に比して短かく、業績の多くは知られていないと筆者には感じられている[4]。この筆者はジョーンズを「最も強力な色彩の使徒」であったと述べているが、『装飾の文法』初版の図版を一見すれば分かるように、ジョーンズの作り出す石板多色刷りによって色のコントラストが幾何学的に積み重なるデザインの数々は、その美しさに驚くものである。彼が『装飾の文法』に収録した世界各地の土地や地域の名称に関連付けられた装飾文様は広く紹介されるようになり、それらは現代においてはカラー図版の印刷技術によってさらに美しさが増しているといえる。ジョーンズはそうした装飾文様の印刷技術をブルジョア階級向けの贅沢な装飾本の印刷に応用していった。一方で日用品の印刷におけるデザインも行い、トランプやクリスマスカードなどのデザインも多く残した[5]。1850 年代から 1860 年代には室内装飾を多く手掛け、特に富豪の収集家であるアルフレッド・モリソン(Alfred Morrison, 1821-1897) の邸宅の装飾が有名である[6]。1885 年から出版が始まり 1892 年に「J」の項目の初版が出た『オックスフォード英国人名辞典』(*The Oxford Dictionary of National Biography*) には、大英博物館の貨幣部門で長く活動したウォーリック・ロス(Warwick William Wroth, 1858-1911)によるジョーンズの建築から出版までの仕事を詳細に網羅した紹介が記されている。ロスは次のように述べる。

ジョーンズの得意分野は室内装飾であった。彼は室内装飾における色彩の重要性を強く主張し、「色彩のない形態は魂のない肉体だ」と宣言した[7]。彼は発明の才が豊かで、彼の示したデザインの事例や『装飾の文法』の出版や他の著述によって、イギリスの壁紙やカーペットや家具に多大な影響を及ぼした。

Jone's forte was interior decoration. He insisted strongly on the decorative importance of colour, declaring that "form without colour is like a body without a soul." He had much fertility of invention, and by his example and by the publication of his "Grammar of Ornament" and other writings exercised a considerable influence on the designs of England wall-papers, carpets, and furniture. (vol.30, 150)

彼が建築や内装に関わった建物で現在まで残されているものは少ない。博覧会関係のものはすべて取り壊されており、ロンドン市内の建物も 1940 年の大空襲によって多くが瓦解した。しかし彼のデザイン企画によるトランプカードが、その背表紙を並べると壮観な眺めになることを思えば、ジョーンズのデザインはすでに日常の中にすっかり溶け込んでいるとも言えるのである[8]。

20 世紀になってからのモダニズム建築の隆盛が起こり、この時期にジョーンズの「一般原理」にある各命題("propositions ")に真剣に取り組んだモダニズムの建築家として、フランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright, 1867-1959)やル・コルビュジエ(Le Corbusier, 1887-1965)が知られている[9]。彼らは新しい建築の概念を見出すにあたって、ジョーンズの装飾に関する思想に強く共鳴した。1950 年代に入ると、モダニズムを歴史的に振り返る機運が起こり、ジョーンズの『装飾の文法』に起源的な言説とデザインの精神を見出す批評的態度が優勢になった[10]。それ以後、モダニズムの歴史的研究の中でジョーンズに関する関心は失われることなく、特に『装飾の文法』を中心とした研究が現在に至るまでさまざまな視点から行われている。

モダニズムの胎動がまだ伝わっていなかったであろう 20 世紀の初めのイギリスでは、実際はジョーンズは殆ど忘れられた存在になっていた。1911 年のブリタニカ百科事典(*Encyclopedia Britannica*, 11th ed.)に掲載された "Owen Jones"の項には、たった 110 ワードあまりの説明しかなく、そこには『装飾の文法』は紹介されておらず、「アルハンブラの特別な探究」("a special study of the Alhambra")を行ったという点が簡潔に述べられているだけである。一方で 20 世紀中葉になってモダニズムの展開史を追

求する研究者達は、このようにジョーンズの評価が低かったのは何故なのかという点には関心を向けない。彼らは自らが探究するモダニズムの起源の一つを見つけた、という立ち位置にあり、その「起源」の過去の歴史的評価に頓着する様子はない。一方 19 世紀のイギリスにおけるジョーンズへの評価は、ロンドン万国博覧会の記憶が薄れ、彼の建築や装飾の創作現場を直接知る人々が去っていくと曖昧なものになった印象がある[11]。アメリカやヨーロッパでは建築におけるモダニズム運動が興隆し、その中でジョーンズの業績に新しく光が当たることになった。しかし不思議なことに、オーウェン・ジョーンズが生涯にわたってどのような経験を積み業績を残したかについての伝記的研究は、21 世紀に至る今日でも十分であるとは言えない状況である[12]。次には彼の家族について墓碑銘から考察する。

2. オーウェン・ジョーンズとその家族：墓碑銘を通して

オーウェン・ジョーンズが生まれたのはロンドンの中心部、アッパー・テームズ通り（Upper Thames Street）の一角であった。父オーウェン・ジョーンズ（Owen Jones, or Owain Myvyr, 1741-1814；以下混同をさけるため Sr を付す）はウェールズ北部にあるスランビハネル・グリン・マビル（Llanfihangel-Glyn-Myfyr）の出身であった。現在でもウェールズ語話者が非常に多い地域である[13]。オーウェン・ジョーンズ Jr の生育環境には、ロンドンの中心部で育ちながらウェールズ語の行きかう独特の雰囲気があったと考えられる[14]。前述したように、ジョーンズは特に若い時期に多様な国籍の人々と交流したと考えられるが、文化背景が異なることに許容性が高いと考えれば、万国博覧会の展示物を取り扱うには適任であったともいえるだろう。

オーウェン・ジョーンズ Sr は 1760 年代にロンドンに出て毛皮商となり成功を収めた。彼が 68 歳の時に、息子オーウェンが生まれたわけであるが、息子が 5 歳の時に逝去している。母ハンナ・ジェーン（Hannah Jane, 1772-1838）についてはよく知られていない。ハンナはジョーンズとの間にキャサリン（Catherin, 1808-1884）とハンナ・ジェーン（1811-1890）の二人の娘を生んだが、その後ロバート・ロバーツ（Robert Roberts, 1757?-1821）と再婚した。なお、ジョーンズの姉キャサリンと妹ハンナ・ジェーンは二人とも未婚のまま生涯を閉じた。

ジョーンズの父の追悼記事（1814）は次のように記されている。

ジョーンズ氏は未亡人と 3 人の子どもを残したが、彼らには十分なものが与えられていることを嬉しく思う。彼は自身の故郷に愛国的な心情を持っており、生まれた地の近くに最近土地を購入し、素晴らしい家を建て、息子に遺贈した。遺産として残されたものは常に家族で保持するようにとの要望を添えて。

Mr. Jones has left a widow and three children, but we are happy to say that; they are well provided for. Such was this patriot's love of his native country, that he purchased some land lately near the spot where he was born, and build an excellent house on it, which he bequeathed to his son, with a request that it may be always kept in the family. (*Monthly Magazine,* 379)

ジョーンズ Sr は毛皮商であり、ロンドンに店を構える手工業者の一人であった。彼が現在も知られているのは、後半生に精力的に行ったウェールズに残された中世期の古文書を収集し出版したことによるものである。彼はウェールズ文化振興のためのロンドンを中心としたウェールズの文化協会、グィネズィギオン(Gwyneddigion Society)の事務長となり、ウェールズ詩歌や物語を記した古文書の収集や編集を行い、中世ウェールズ文学選集(*The Myvyrian Archaiology of Wales*, 3vols, 1801-1807)を自ら資金を出して出版した。こうした古文書収集や出版活動に惜しみなく出資し、その総額は 5000 ポンドにもなったということである[15]。

最晩年はハンナ・ジェーンと結婚しウェールズ文書の出版活動からは遠ざかった。代わって子どもを持ったのが遅かったこともあり、ジョーンズ Sr は子どもたちの行く末には腐心したと考えられる。追悼記事に彼の財産を子どもたちに残すことが書かれているが、家族でその土地と建物を「保持」するようにという条件が書かれているのは、その財産は決して他者には譲らず家族で管理すべきという示唆と思われる[16]。

オーウェン・ジョーンズ Jr に関わる墓碑および銘板(plaque)が少なくとも 3 つ残されている。まず最初に最も古いものとして、父オーウェン、母の再婚相手ロバーツ、そして母ハンナ・ロバーツの三人の名とウェールズ語の詩が刻まれた大きな墓碑がある[17]。これはロンドン中心部にあるオール・ハローズ教会(All Hallows Church)にもともと建てられたものだが、1940 年の大空襲により教会が破壊されたためウェールズの故郷の村へ移された。下記は「オーウェン・ジョーンズの思い出に捧ぐ」と始まる、

碑文の英語で書かれた部分である。（墓碑銘にはウェールズ語の詩が差しはさまれているがここでは割愛する。）

Sacred to the Memory of Owen Jones.
Who departed this life September 26th 1814 aged 74 years. [省略]
Also of Robert Roberts. Who died May 3th 1821. In the 64th year of his age.
Also of Hannah Jane Roberts. Relict of both the above:
who departed this life 23th April 1834. Aged 65 years.

1822年（もしくは前年の1821年後半）、ロバーツの死のあとでオーウェン・ジョーンズSrが収集した膨大な中世期以降のウェールズ文学の草稿を、ウェールズ文化振興の団体で、当時再結成されたクムロドリオン（Cymmrodorion）が母ハンナ・ジェーンから買い取った[18]。この草稿は「最近」未亡人の所有となったと書かれており、ロバーツが生存していた時期には交渉に入ることが出来なかったかと推測できる。クムロドリオンは1770年代に一旦解散へと向かい、それと入れ違いにオーウェン・ジョーンズSrが先述したグィネズィギオンを作って活動を始めた。1820年にクムロドリオンがジョーンズSrの死と入れ替わりに息を吹き返しているわけであるが、ジョーンズの残した中世のウェールズ文書が彼らにとって垂涎の的であったというのは容易に推測できる。

次はオーウェン・ジョーンズJrの墓碑銘である。彼の墓所はロンドン中心部の北西部にあるケンサル・グリーン墓地（Kensal Green Cemetery）にあり、当時の報告には「主たる会葬者である家族の人々に加えて、最後のお別れをしたいと願う多くの学術的な人々が集まった」（“..in addition to the members of his family as chief mourners, there had assembled a considerable number of scientific men desirous to pay the last tribute.” *The Builder*, May 9,1874, 385）とある。ジョーンズが埋葬された墓地には墓碑が建立された。この墓地も墓碑も、周囲に比べて小ぶりなもので、墓碑銘は写真下部の通りである。ここにはジョーンズと二人の姉の名がある。キャサリンが長女であることが明記され、父の名“Owen Jones Myfyr”が刻まれている。ジョーンズが埋葬されたとき、この墓石が置かれていたかどう

かは定かでないが、その後姉が亡くなるまではジョーンズの名だけが刻まれていたようである[19]。姉と妹の逝去に際して墓碑に名が刻まれたかと思われるが、その経緯については詳しくわからない。

最後にもう一つ、ロンドン郊外のシデナムにあるバーソミュロー教会（Church of St Bartholomew, Sydenham）に置かれているジョーンズ追悼の銘板である。1874年、ジョーンズが逝去したあとで、姉と妹はジョーンズの友人で妻の兄であるジェイムズ・ワイルド（James William Wild, 1814-1892）に銘板のデザインを依頼した[20]。この銘板と墓石との関係は不明であるが、ジョーンズの事績を伝える公共の空間に設置された像などが殆ど残されていない中で貴重な一つと考えられる。

Owen Jones (architect),
Kensal Green Cemetery
(Wikimedia Commons)

In Memory of Owen Jones Archi
Died April 19th 1874
Aged 65
Also of
Catherine
Sister of the Above
And elder Daughter of
Owen Jones Myfyr
Died March 12th 1884
Aged 76
Also of
Hannah Jane
Younger Sister of the Above
Died September 14th 1890
Aged 79 Years

ジョーンズの私生活や友人関係についてあまり詳しく研究されていない理由の一つに、書簡や同時代の人々の記録などから彼を知ることができる情報が少ないという点がある。その理由として彼のルーツがウェールズであること、彼自身が自らの記録を出版や公開していないこと、彼に関する書簡の多くが草稿のままであることなどが挙げられる。それに加えて、妻イザベラ・ルーシー（Isabells Lucy）が彼の死の後を追うように翌年の1875年に逝去していることもあるだろう[21]。ジョーンズと妻との間に子

はなかった。妻イザベラについての情報も非常に少ない[22]。

これまでみてきたとおり、オーウェン・ジョーンズが生まれ育った環境は父の出身地であるウェールズの人々に囲まれたものであった。オーウェンは9歳のころにパブリック・スクールの一つであるチャーターハウス（Charterhouse）に在籍していたようであるが、1年ほどで退学しロンドンの私塾で勉強を続けたという[23]。父の残した財産は、彼にパブリック・スクールからオックスブリッジへというエリートコースを歩ませるには十分であったと推察しうるが、そうはならなかった。チャーターハウス退学について具体的な理由を示す記録は何も残されていないが、幼い彼が英語とウェールズ語とのバイリンガルであったとすれば、なじめなかったことも理解できる[24]。

パブリック・スクールのラグビー校の著名な校長を父に持つ、詩人であり批評家であったマシュー・アーノルド（Matthew Arnold, 1822-1888）は、1867年に『ケルト文学の研究』（*On the Study of Celtic Literature*）を出版した。この本の中でアーノルドは、ウェールズ語による中世期の文書収集に関してジョーンズ Srに言及している。この部分は同時代のロンドンの読者であれば面白い逸話とでも読みうるかもしれないが、現代の目で見るとウェールズ人が文学的な貢献をしたということに対する、からかうような嘲笑の気分が明確に現れている。アーノルドはウェールズの古文書を活字にし出版したジョーンズ Sr の業績に対して、ジョーンズの出版した書籍は間違いだらけであり、その作者に生きている間に栄誉よりも批判をもたらしたと述べ、そのような人物のオール・ハローズ教会にある墓碑銘はしかしウェールズの方向ではなく東を向いている、と嘲るように記述する。しかしながら彼が古文書を収集した成果によってウェールズ文学は「デンビシャーの百姓の名［すなわちオーウェン・ジョーンズ Sr］（“the Denbighshire peasant’s name”）27」に敬意を払うことになったというのである[25]。19 世紀のイギリスでは、教育制度が整備されていくのと並行して、英語の国語化とそれに付随する英語ではないブリテン島に残る言語の抑圧が起こっていた[26]。マシュー・アーノルドはそうした英語による教育と文化的価値の体現者ともいえる存在だった。それはイギリスで尊敬されるべき教養を身につけた文化人の型にも当てはまるものであり、それを念頭に置けば、オーウェン・ジョーンズ Jr にとって、イギリスの上流階級の人々の装飾に関わる仕事をすることは、彼のウェールズとのつながりを明らかにしないことにつながっただろう。建築家オーウェン・ジョーンズについて、しばしばウェー

ルズが消し去られて語られるのは、偏見を避ける意味合いがあったと考えられる[27]。

ジョーンズは 1825 年、16 歳の時に建築家のルイス・ヴァラミイ（Lewis Vulliamy, 1791-1871）に弟子入りし 5 年を過ごし、1829 年にはロイヤル・アカデミーの建築コースの学生となった。そして先に述べたように、ギリシャへ向かい中近東へと経めぐる旅に出る。ジョーンズにとってはこの旅は、新しい自分を得るための旅と思えただろう。ギリシャで知り合ったフランス人のジュール・グーリーとの友情が、ジョーンズのそれ以後の仕事の方向を決めた。グーリーを失い、一人で多色刷り石版印刷の開発に没頭し、資金を投じて父からの財産もかなり失くしてしまうことになるわけだが、彼が一流の人間になるために父が財源を残したと考えれば、そうした成り行きも当を得たものであったといえる[28]。

3.『装飾の文法』の趣旨

『装飾の文法』が 1856 年に出版されたとき、ジョーンズは既にこの著作に先立っていくつかの関連著作を出版していた。それらの中にはロンドン万国博覧会（1851）の終了後、ロンドン郊外のシデナムに移転されたクリスタル・パレスに展示されたエジプト宮殿、ギリシャ宮殿、アルハンブラ宮殿の内容を紹介する一連の「クリスタル・パレス・ライブラリー」（Crystal Palace Library）として出版されたガイドブックが含まれている。それらのガイドブックでは、ギリシャについては画家であり美術史家であるジョージ・シャーフ（George Scharf） が解説のほとんどを記述しており（*The Greek Court Elected in the Crystal Palace*）、エジプトにおいてはジョーンズと彫刻家のジョセフ・ボノミ（Joseph Bonomi, 1796-1878）が建築と彫刻の説明をし、エジプト学者のサミュエル・シャープ（Samuel Sharpe）が歴史の解説を行っている（*Description of the Egyptian Court; Erected in the Crystal Palace*）。アルハンブラについて書かれた『クリスタル・パレスのアルハンブラ宮殿』（*The Alhambra Court in the Crystal Palace*, 1854）はジョーンズがかなりの部分を執筆しており、これは『装飾の文法』（1856）のアルハンブラの項と内容が一部重複している。この本の最後に付けられた歴史的解説は、1842 年に出版が完了したグーリーとの共著にあるデ・ゲヤンゴーズ（Pascal De Gayangos） のものが再録されている。『装飾の文法』の文章による解説の部分の記述に統一性がない印象があるのは、おそらくすでに出版されている内容と重複する、もしくは他の解説者

に委ねて記述したところは割愛する傾向があるためだと考えられる。これらの事から明確に分かることは、『装飾の文法』の出版においてジョーンズが焦点としたのは、多色石版刷りによる多彩な装飾文様のモデルを提示することであり、その説明を歴史的にではなく、その地域の文明が生み出した典型的な文様として提示することだったと考えられる。理解の補助とするべき歴史的情報は、すでに以前の出版物や博覧会を通して行われた説明によって、それぞれの歴史の専門家が明示しているからである。

ジョーンズのクリスタル・パレス・ライブラリーのアルハンブラの説明はかなり長いものであるが、おそらくそれは彼がアルハンブラ宮殿に、エジプト、ギリシャ、ローマ、ビザンチン、アラブ地域のあらゆる装飾を吸収し洗練させていく様を見ているためだろう。ジョーンズはロンドンに再現されたアルハンブラ宮殿をこのように説明する。

> あらゆる他の芸術様式から集めた原理的なものがここ［アルハンブラ宮殿］に集められているのみならず、より普遍的な形で現れている。ここにある碑銘は、エジプト芸術が彫像に命と目的を与える力を分け持っている。エジプト人が如何に巧みに象形文字を装飾に組み入れていても、ムーア人が表現するものは碑文の詩的要素や素材の形態においてエジプト人を超えているのだ。ギリシャの装飾にみられる優雅さと洗練を上回るものがある。ギリシャの人々と同様、純粋な形を掴もうとすることに専心しながら、ムーア人たちはその多様性と想像力によってギリシャ人たちより優れているのである。幾何学的な組み合わせにおいては、ローマ人やビザンチンの人々、そしてアラブの人々によって伝えられてきた形式をはるかに凌いでいたのだ。
>
> Every principle which we can gather from every other style of art is not only found here, but is also more universally obeyed. By the inscriptions, it shares with Egyptian art the power of giving life and purpose to the monuments. However skilfully the Egyptians wove their hieroglyphics into ornament, the Moors went beyond them, not only m the poetry of their inscriptions, but in the material forms by which they were expressed. The grace and refinement of Greek ornament is here surpassed. Possessing, equally with the Greeks, an appreciation of pure form, the Moors excelled them in variety and imagination. In geometrical combinations they went far

beyond the models handed down to them by the Romans, Byzantines, and Arabs. （Jones, *The Alhambra Court in the Crystal Palace* 87）

装飾に原理的な枠組みを与えることはジョーンズの一つの目標であった。それは『装飾の文法』において「一般原理」（Jones, *The Grammar of Ornament*, 1856; “General Principles,” 5-8. 以下初版から引用）として 37 の命題（“Propositions”）を提示したところに明確に現れている。命題 3 と 4 で語られている装飾が目指すべき「どのような欠落もない」（“the absence of any want”）「安息」（“repose”）の形は、ジョーンズの目にはアルハンブラに感じるものであったのだろう[29]。

それではジョーンズはそうした原理的なものを理解することがなぜ必要であり、同時に夥しい数の装飾モデルとしての色彩図版を提示したのであろうか。『装飾の文法』の序文には、それらの図版は複写するためではなく、原理を掴んだうえで装飾に対するより高い理想を持ってほしいためだと語る。

> 敢えてこのように望むのである。あらゆる装飾様式が表す美しい形態の多くをこのように並置して出版することで、模写することで満足してしまう、今の時代の残念な傾向を阻止する手助けにならないかと。去ってしまった時代に特有の流行が続くとき、その装飾が美しいものと考えられていた特殊な事情を確かめず多くは完全に無視するので、その特有の形態は実は何らかの不足の表現であるため、それがそのまま移植されたりすると完全に間違ってしまうのである。
>
> I have ventured to hope that, in thus bringing into immediate juxtaposition the many forms of beauty which every style of ornament presents, I might aid in arresting that unfortunate tendency of our time to be content with copying, whilst the fashion lasts, the forms peculiar to any bygone age, without attempting to ascertain, generally completely ignoring, the peculiar circumstances which rendered an ornament beautiful, because it was appropriate, and which as expressive of other wants, when thus transplanted, as entirely fails. （*Grammar*, “Preface,” 1）

「何らかの不足の表現」というのは、たとえばタイル焼成の技術が未熟であればタイルの形態が限定されてしまうことであるとか、染料が限定されているためある種の色が使えないとか言った材料の問題もあれば、装飾に対する考え方や自由な発想が発達していないことに起因する職工の技術不足まで様々なものが考えられる。過去

に行われた建築装飾の多くは、何らかの制限を受けて作られたものであり、これからの装飾は過去から学びよりよいものを目指す必要があるというのがジョーンズの主張である。彼は次のように続ける。

> 芸術の原理を確立すること、もしくは様式を作ることを、過去の事例からすっかり独立して試みるというのは、全く愚かな行為である。それは何千年も積み重ねられた経験と知識の集積を一瞬にして否定することになるだろう。そうではなくて、過去に延々と続いてきた労働の全てを私たちが受け継いだ遺産と考えるべきであり、盲目的に過去の事績に追従するのではなく、正しい道を見つけるための案内としてただ用いればいいのである。
>
> To attempt to build up theories of art, or to form a style, independently of the past, would be an act of supreme folly. It would be at once to reject the experiences and accumulated knowledge of thousands of years. On the contrary, we should regard as our inheritance all the successful labours of the past, not blindly following them, but employing them simply as guides to find the true path. （*Grammar*, “Preface,” 1）

この部分に対応する命題として、命題 36 を上げることができるだろう。「過去の作品に発見することのできる原理は私たちのものである」（“The principles discoverable in the works of the past belong to us.”）、「それは目的のために手段を選ぶことである」（“It is taking the end for the means.”）とジョーンズは述べる。歴史的に見れば、ジョーンズの言説には 19 世紀のイギリスにおける基調低音ともいえる進歩主義のニュアンスが読み取れるが、その背景にはエジプトやその他アラブ諸国から数限りない宝物や彫刻、その他の文化遺産を持ち帰り自国の博物館に所蔵していく文化帝国主義ともいえるイギリスの政治・軍事的ヘゲモニーがある。ジョーンズはこうした政治性に対しては無頓着であったように見受けられるが、それは彼の父親がウェールズの文化的独立性に執心したこととも何等か関係していると見ることも出来るだろう。ジョーンズは『装飾の文法』でケルトには言及したがウェールズ地方は語らず、実際にウェールズにも戻らなかった。それは先にも考察したように、イギリスの支配下におかれ文化的抑圧をうけたウェールズとの関係を自らと切り離しておくことが、イギリスにおいて自らの血統の暗示する政治性からも自由になることだったからだと考えられるだろう。

4. ジョーンズの装飾文様の幾何学的展開－平面充填

ジョーンズの『装飾の文法』の章立ては、太平洋諸島の文様や自然の草花についての章を除き、大きく三つに分けられており、まず古代の文様に関わるカテゴリー（エジプト、アッシリア、ギリシャなど）、次にイスラム圏から中国にかけてのカテゴリー（ビザンチン、インド、中国など）、そしてヨーロッパ（ケルト、中世ヨーロッパ、イタリアなど）となっている。これらの章立ては地理的な厳密性には基づいておらず、ジョーンズが考えたその地域にまつわる文様の特徴を掴んで地域名を付けたもの、と考えられる。前項で考察したように、ジョーンズは過去の文様を模写するのではなくそれらを参考に新しい文様を作り出すために『装飾の文法』を出版した。つまり装飾の歴史を彩色文様として紹介したものではなく、未来に向けての装飾文様の展開の基礎を示している、とでも考えればよいものである。これらを鑑み、ここではジョーンズの装飾文様のうち平面充填の事例をとりあげ、彼の考えた「展開」の在り方を考察する。

図 1 にあるポンペイのデザインであるが、描かれている文様のほとんどが平面充填に応用できるものである。平面充填の場合正方形、四辺形、三角形以外のパーツも必要となるが、ジョーンズは成型が容易で仕上がりが強固なものになる人工タイルの製造法を紹介しており、タイルの形状にさほど制約はないと考えればよいだろう[30]。全体の長方形の文様集成の周りを取り巻くのは、古くから中国などでは雷紋とよばれ、ギリシャ、ポンペイ、ローマなどではギリシャ雷文と呼ばれる渦巻き型のデザインである。それらには幾つものパターンがあり、白地に黒の線で描かれたものから赤青黄、もしくは赤緑黄をあしらわれたものまで多種あり、それぞれが同じ渦巻の形をとっていない。雷紋のパターンに加えて、矢羽根柄とも言われる平行四辺形の組み合わせで出来ている柄が、右上端（赤黄白）、中央上（白黒）に使われている。その他格子柄の応用（右下角）、六角形の文様使い（右中央端、上中央）などがはめ込まれている。図 2、図 3 は、ジョーンズの水彩による下絵であるが、どちらも雷紋の応用と見られるデザインであり、モザイク文様として描いている。

これらすべての装飾文様をいくつか組み合わせ、また文様に色や組み合わせで変化を与えていくだけで、数限りない種類の床面のタイル充填が可能となる。当然、タペストリーやカーペットなどにも利用できる文様である。このように装飾文様の見本帳としての機能があるジョーンズの多色印刷によるデザインは、デザインの技術を学

図1　Pompeian No.3, Mosaics from Pompeii and the museum at Naples New York City Library collection [Lithographer for *The Grammar of Ornament*, Francis Bedford, 1816-1894]

図2　V&A Drawing by Owen Jones, 8113.1

図3　V&A Drawing by Owen Jones, 8113.7

ぶ学生たちにとって長く教科書として利用された。初版はジョーンズが監修した多色石板刷りのものであったが、後の版では多色印刷の品質が明らかに劣化したこともあり、次第に工芸科などのテキストとしてのみ使われるものになっていったようである。『装飾の文法』のデザインを掲載した1頁ごとの美しさが再評価されるようになったのは、おそらく 20 世紀後半になってグラビア印刷などの技術が向上し、原本よりもさらに鮮やかに美しくジョーンズの作品を再現できるようになってからである。

次には「ムーア式装飾」(Moresque)と題された章にある、アルハンブラ宮殿にある文様を参考にしたものを取り上げる。図4と図5は同じ初版から取ったものであるが、色彩の傾向も色数も異なっている点が興味深い。図 4 は全体にオレンジと黒(もしくは濃い緑)が基調であるのに対し、図5はベージュ、紺、黄色、緑の色で全体が統一されている。このような違いは、印刷そのものが手仕事であったことを示唆していると思われるが、色彩をどのように配置するかについて一つの解答はない、ということを同時に示しているといえるだろう。柄はそれぞれ壁面装飾(腰羽目)や柱にあった装飾からデザイン化したものである。

図 4 と図 5 は、それぞれ左から三つはそのまま平面充填が可能であり、それぞれ 1 種(3 色)、4 種(4 色)、2 種(各 2 色)のタイルで敷き詰めることが出来る。右端の文

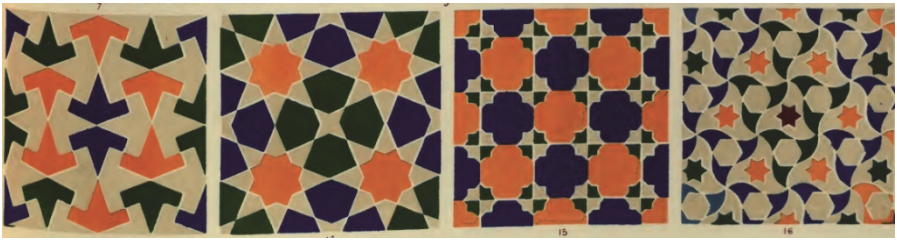

図 4　Moresque No.5 Plate XLIII（McGill University Library)

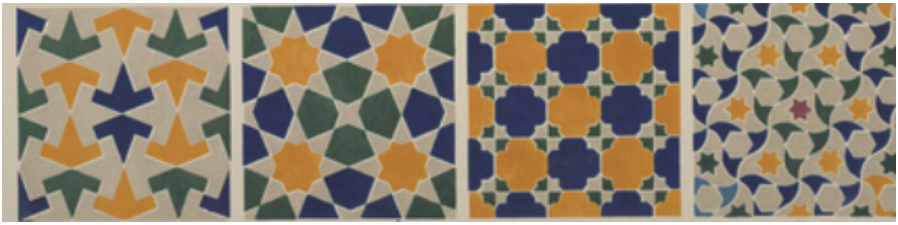

図 5　Moresque No.5 Plate XLIII（New York Public Library)

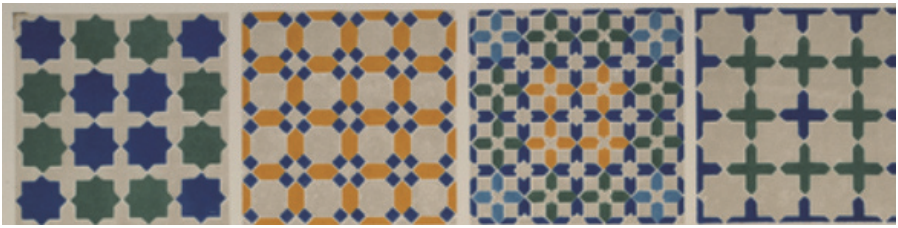

図 6　Moresque No.5 Plate XLIII（New York Public Library)

様は宮殿の壁面装飾のデザインであり、六芒星形の模様を削除すると3種(2色)のタイルとなる。

図6は4つの柄がそれぞれ格子柄をベースにしたデザインとなっている。特に両端の二つに注目すると、この二つは色を反転させたものであり、色の使い方ひとつで同じデザインでも全く印象が異なってくることを示している。こうしたデザインにおける様々なテクニックは、今日では当然のこととして受けいれられていると推測できるが、ジョーンズのように幾何学模様の可能性をこれだけ徹底的に示した著作は、おそらく『装飾の文法』以前にはなかったのではないかと思われる。

ジョーンズには幾何学について何らかの見識があったという点については、同時代の証言がある。

> もともと穏やかで遠慮深い性質であったが、オーウェン・ジョーンズは決して、一時の成功の為や偏見を持ったことによって、彼の原理を踏み外すことはなかった。彼は驚くべき精密さと正確さのある知性の持ち主で、建築に関係する限りの多くの科学的分野に精通していた。例えば幾何学については、彼は相当の知識を持っていた。それを彼はもっとも単純なものからもっとも複雑なものに至るまで、驚くほど美しい幾何学的デザインを増殖させた審美的表現へと転換させたのである。
>
> Though naturally modest and of a retiring disposition, Owen Jones never swerved from his principles, －never yielded, for the sake of a momentary success, a single point to prejudice. He possessed an intellect of remarkable exactness and precision, and had mastered many branches of science in so far as they bore upon architecture. Of geometry, for example, he had an extended knowledge; which he turned to good aesthetic account in multiplying geometrical designs of extraordinary beauty, from the simplest to the most intricate.（*The Builder,* May 9 1874, 384）

ジョーンズの数学的知識はデザインに生かされるために使われたということであるが、複雑な色と形で構成される文様の構造を一瞬で理解し、面的な装飾の全てを記憶する能力によって、二つとして同じではない平面充填のデザインを展開することが出来たのであろう。

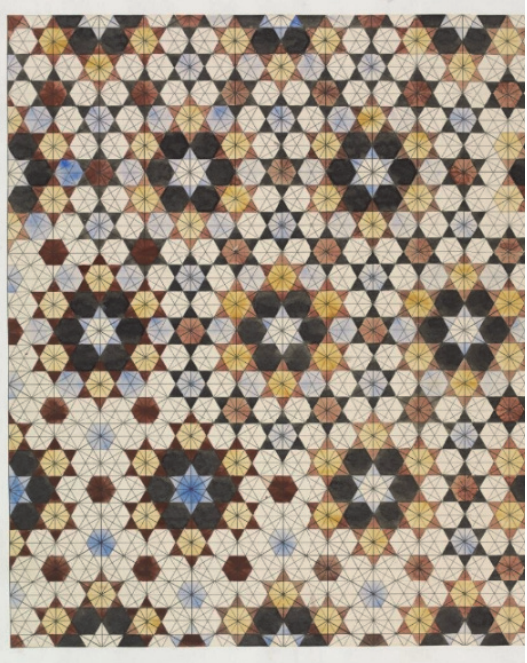

図 9　Owen Jones, Design for a tiled pavement in Islamic style (ca. 1840-50) V&A 8115.1.

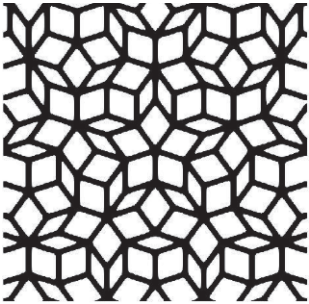

図 7　Penrose-P3

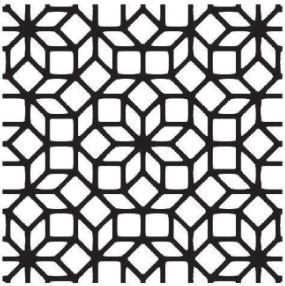

図 8　Ammann-Beenker
Imediegwu より

最後に、ジョーンズのデザインにおける規則性について、非周期性を持つタイル張りとの関係から若干の考察を加えたい。非周期性とは、敷き詰めて行くと周期的に同じ文様が繰り返されることがないものをいう。このタイプのタイル張りとして有名なものに、1970 年代に発表された数学者、物理学者であるロジャー・ペンローズ（Roger Penrose, 1931-）によるペンローズ・タイル（Penrose tile）がある（図 7 はその 1 種、図 8 は同種の性質をもつもの）[31]。2007 年、このペンローズ・タイルのパターンが、15 世紀までにイランにある寺院のイスラム文様の中に現れていることが報告され、話題となった[32]。これはイランのイスファハン（Isfahan）にあるダルヴェ・イマーム（Darb-e Imam）寺院にあるもので、12 世紀ごろからイスラム文様の構造が複雑になっていった経緯のなかで生まれたものと考えられている。特に非周期であることを当初から意識したものとは考えられていないが、非周期タイル張りを実現することができるタイルの組み合わせは、伝統的にギリー・タイル（girih tiles）と呼ばれるものの中に当時すでに存在

していた。

ジョーンズのデザインにあるものに非周期的なものは見当たらない。非周期性タイルは無限にタイルを張り続けることが出来るため、「端」や「終わり」は自動的には生まれないものであり、文様が同じ向きで繰り返されることがない。ジョーンズの装飾文様が直線で区切られた平面を飾るための安定的な構図を主としているのも、室内装飾を目途としているためであろう。しかしジョーンズの習作の中には、何らかの不規則性をデザインの中に盛り込もうとしているように見えるものもある。図 9 は、縦横斜めに敷き詰められた小さな6角形をベースとしたものであるが、6角形の多くを黄色と黒で色付けしそれらの色の組み合わせで大きな6角形を作り、茶色も黄色のヴァリエーションとして用い、青みを入れる部分をある程度考えたところで終わっているように見える。図7および図8は、それぞれ10角形および8角形が基調となって表れているものであるが、このパターンに図 9 の色の展開を合わせてみることもデザインとしては面白いだろう。前述したように、彼は「色彩のない形態は魂のない肉体だ」と言ったと伝わるが、色彩をより新しい組み合わせで使う平面充填の一つとして、非周期性タイルの手法を考えることも可能なのである。

5. おわりに

以上、オーウェン・ジョーンズの装飾の文法について、彼の建築家、装飾家としての仕事を紹介しながら、伝記的な事項でこれまで整理されて来なかった点について検討し、装飾の文法の実践について考察を加えた。彼の姉と妹の書簡は、ウェールズにある図書館に残されているようであるが、それらの資料を直接利用してジョーンズの伝記研究に生かした研究者は今回発見できなかった[33]。ジョーンズの家族について最も明確に伝えているのは墓碑銘であり、石に彫って残すことを重要なものと考えるウェールズの伝統的思考が、イングランドに何世紀も隷属してきた歴史から生み出されたものだと考えると、ジョーンズについてもこれまでと違う視点からの理解が生まれてくるように思われる。ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）の社会主義も、クリストファー・ドレッサーのオリエンタリズムも、ジョーンズとは距離があった[34]。二人の後輩の立ち位置は、イギリスの社会に主軸を置いたものだったからである。

彼にとってのアルハンブラは、イギリスの政治性から自由になるコスモポリタンとし

ての自己認識を強化するものであった。同時に、翌年になれば取り壊されてしまうロンドン万国博覧会の装飾を一手に行ったジョーンズは、イギリスの歴史的な瞬間に立ち会うことになった。彼は大英帝国として世界に覇権を広げる、そうした国の博覧会の中心会場であるクリスタル・パレスを装飾する。しかし、彼が室内装飾を行ったものの大部分が今は存在せず、彼が室内装飾に発揮した様々な力の源泉を、現代では『装飾の文法』を通してしか見ることが出来ないのである。歴史的地域名称を付けたこの本の章立ては、植民地支配のために地理学を精緻に作り上げていく当時のイギリスの姿に何等か影響を受けているとも見ることが出来るが、その実そこで示されたデザインの本質は、非場所的であり、非歴史的な、可変的文様パターンの美である。言い換えれば、美しく装飾する行為の究極的な平等性だといえるだろう。

（本稿は JSPS 科研費 21K00366 の助成によるものである。）

---

[1] エリオットは自宅の内装をジョーンズに依頼したことがあり、ジョーンズと交流があった。“Happily Mr. Owen Jones has undertaken the ornamentation of the drawing-room, and will prescribe all about chairs, &c. I think, after all, I like a clean kitchen better than any other room.” (Eliot, *Life,* vol.2, 289)　1863 年のエリオットの書簡には、ジョーンズが 2 日泊りがけで彼女の家の内装を監修したことが綴られている(See, 291)

[2] これらの博物館の初期の収蔵物については、*A Catalogue of the Articles of Ornamental Art* および *A Catalogue of the Museum of Ornamental Art* を参照のこと。

[3] *A Catalogue of the Museum of Ornamental Art* に収録された“Appendix A –Formation of the Museum”は、Henry Cole, Owen Jones, Richard Redgrave の 3 名の連名と 17 May 1852 と日付があるもので、そこには“Notwithstanding the indifference to principles of Ornamental Art which is too prevalent in the present age . . . there are signs that the existence of laws and principles in Ornamental Art, as in every branch of human science, is beginning to be recognized.(118-119)”と書かれている。この 4 年後に『装飾の文法』が出版されるのであるが、装飾芸術における原理という命題を明らかにすることがジョーンズにおいては非常に重要なタスクであったことが分かる。

[4] ジョーンズについてはいくつかの追悼記事が出されたが、書き手によって視点が異なっている場合が散見される。次の追悼文ではジョーンズの晩年の病について言及されているが、ウェールズで生まれたという、事実とは異なる情報が書かれている。“Mr. Owen Jones. This eminent professor of decorative art died on April 19, after a long and painful illness. Mr. Owen Jones, who was born in Wales in 1809, early showed a talent for art, and became a pupil of Mr. Lewis Vulliamy, the architectural designer and decorator.” (*The Annual Register*, 149.) ジョーンズは実際はロンドンで生まれておりウェールズというのは誤りであるが、小さいころから芸術への才能があったとい

う点はルイス・ヴァラミイ（Lewis Vulliamy, 1791-1871）の弟子になる選択とつながっており、彼の生育環境を知る人物の筆によるものではないかと考えられる。

[5] ジョーンズの彩色本などの商品制作については Cook 参照。彼は印刷会社の De La Rue 社へのデザイン提供を 1844 年から 1863 年まで行った。The British Museum および The World Playing Card 2018 を参照。

[6] ジョーンズの装飾の仕事の多くは、上流階級向けの室内家具全般を取り扱っていた Jackson & Graham 社と行ったものである。この会社はジョーンズの他に Christopher Dresser（1834-1904）もアドヴァイザーとして雇い入れている。1876 年、ドレッサーはこの会社の社屋で、中国と日本から取り寄せた物品およそ 2800 点を展示する展覧会を企画、実施した。詳細は Furniture History Society 参照。

[7] *The Builder* の追悼記事において、受注した The Fishermonger's Company のビルの改装が終わった際、ジョーンズが祝賀のパーティーで話したと記録されている言葉である(385)。Britannica, 1911 参照。

[8] The World Playing Card, 2018 および 2023 参照。

[9] Flores, *Owen Jones: Design, Ornament, Architecture, and the Theory in an Age of Transition*, 249-253 参照。

[10] ジョーンズの建築および装飾分野における研究史は、主に Frankel を参考にした。Frankel は、ジョーンズにモダニズムの源泉を見る研究者として、Nikolaus Pevsner, Alf Boe, David Brett などを挙げている（18-19, 35）。

[11] ロンドン万博に建てられた水晶宮はその後郊外のシデナム（Sydenham）に移築され公園や展示施設が整備された。後述するようにアルハンブラ宮殿を模した展示物も設置され列車でも行けるようになり、運営会社による経営が続けられたが、19 世紀も終わり近くになると人気は下降し、1909 年には運営会社が破産した。ジョーンズの名は、水晶宮人気の凋落と並行して、イギリスでは思い出されることが少なくなっていたと拝察される。The Crystal Palace Foundation 参照。

[12] オーウェン・ジョーンズの総合的な研究として、現在でも重要な情報源となっているのは Michael Darby による未公刊の博士論文 *Owen Jones and the Eastern Ideal*（PhD. Diss., U. Reading, 1974）とされている。この論文は大英図書館による博士論文公開サービス（EThOS）の対象であるが、2023 年 10 月の大英図書館へのサイバー攻撃により 2024 年末においても利用不可能となっているため未見である。

[13] 2021 年の調査では、住民約 200 名のうち 66%がウェールズ語話者である。 Street Check, "Area Information for Llanfihangel Glyn Myfyr, Corwen, Wales"参照。

[14] 父との識別が必要な場合は、Jr を付す。

[15] Phillips 参照。

[16] 父ジョーンズの遺言に関する類似の追悼記事は *Literary Panorama,* 966 などにも見られる。遺言にある土地については Flores, *Owen Jones, Architect.* 9 参照。この土地は William Bagot, second Baron Bagot の領地だったもので 800 エーカーの広さがあったという。Bagot 家のウェールズにおける屋敷は、父オーウェンの村からほど近いところにある Pool Park だった。Bagot History Com 参照。

[17] Hhys, "Grave elegies: three and a half centuries of Welsh poetic tradition"を参照。Llanfihangel-Glyn-Myfyr の村にある墓碑の写真が添えられている。

[18] *Cambro-Briton*, 442 および *Transactions of Cymmrodorion*, xi 参照。
[19] 1881 年に出版された Croft, *Guide to Kensal Green Cemetery*, p.70 には、墓碑に刻まれている人物としてオーウェンの名のみ言及されている。
[20] この教会は 1827-32 年にヴァラミイが建築を行ったもので、ジョーンズが見習いをしていた時期と重なる。ワイルドのデザイン画は Sir John Soane's Museum にあり、銘板の縁取りのデザインと共に"The Beloved Memory of Owen Jones Archt, Died April 19. 1874 Aged 65/ Erected by His Sisters Katherine[sic] & Hanna Jones." とある。Sir John Soane's Museum 参照。
[21] *Sessional Papers* の後半に収録されている"Proceedings at the Ordinary and Other General Meetings, Papers Read, &C."に次のように書かれている。 "Professor Donaldson mentioned in terms of great regret the resent death of Mrs. Owen Jones, the Widow of the late Architect and Fellow of the Institute.(34)" 妻の墓石等については不明である。
[22] 今回筆者が調査した結果、ジョーンズの妻についての言及は、ジョージ・エリオットの書簡に見られるもののみである。 "… Mrs. Owen Jones and her husband—two very different people—are equally enthusiastic about the book [*Scenes of Clerical Life*]." (Eliot, *Life,* vol.2,.11)
[23] Hoskins 参照。
[24] ウェールズ語はケルト系の言語であり、ゲルマン語系の言語である英語とは語彙や文法の上で大きく異なる。英語のみの話者の場合、通常ウェールズ語は理解できない。
[25] アーノルドは、多くの場所で門外不出となっていた中世期の古文書収集を目指したジョーンズ Sr について次のように書く。 "So Owen Jones went up, a young man of nineteen, to London, and got employment in a furrier's shop in Thames Street; for forty years, with a single object in view, he worked at his business; and at the end of that time his object was won. He had risen in his employment till the business had become his own, and he was now a man of considerable means…. Gradually he got manuscript after manuscript transcribed, and at last, in 1801, he jointly with two friends brought out in three large volumes, printed in double columns, his *Myvyrian Archaeology of Wales*. This books full of imperfection, it presented itself to a public which could not judge of its importance, and it brought upon its author, in his life-time, more attack than honour. He died not long afterwards, and now he lies buried in All-hallows Church, in London, with his tomb turned toward the east, away from the green vale of Clwyd and the mountains of his native Wales; but his book is the great repertory of the literature of his nation, the comparative study of languages and literatures gains every day more followers, and no one of these followers, at home or abroad, touches Welsh literature without paying homage to the Dengighshire peasant's name…(Arnold, 26-27) この本はジョーンズ Jr の死の7年前に出版されたが、実父について出版物においてこのように半ば嘲弄されることは侮蔑的なことだろう。またこの語りが受け入れられていた背景には、ウェールズの人々に対する意識的、無意識的な差別感情があったと推測しうる。なお、1892 年の *Oxford Dictionary of National Biography* にある Daniel Lleufer Thomas によるジョーンズ Sr の記事にはアーノルドがジョーンズ Sr の熱心な収集活動を評価していたこととともに、上記にあるジョーンズの出版した書籍は間違いが大変多いという箇所が引用されている。アーノルドの文章がオーウェン・ジョーンズ Sr の評価にはっきりと影響していることが読み取れる。但しトーマスの記事には、ジョーンズ Sr の収集した古文書がクムロドリオンから大英図書館へと移ったこと、その他ジョーンズの出版物についての紹介もされている。Thomas 参照。
[26] ウェールズの言語教育の歴史については BBC Wales history "society and culture" 参照。
[27] 最も最近のジョーンズの研究の一つである Turner による *Owen Jones and the V&A* では、ジ

ョーンズの妻が彼の翌年に死去したこと、姉と妹が彼より長生きしたことを全く把握していない。ジョーンズの伝記的事実について、十分な関心が寄せられていないこと、ウェールズとの関係を全く考慮しないモダニズム以後のジョーンズ研究の傾向が現在でも生きている一つの事例である。“At his [Owen Jones's] death, his wife almost immediately sold the contents of his office and his library at Sotherby's. He had no children and his sisters died without marrying, so there were no relatives to receive any personal papers, if they even survived (perhaps unlikely given his wife's haste to dispatch his professional archive.(17)”

[28] これらの経緯については、*The Builder,* 1874, 384, Flores, *Owen Jones. Architect*, 44 参照。

[29] “Proposition 3. As Architecture, so all works of the Decorative Arts; should possess fitness, proportion, harmony, the result of all which is repose.” および “Proposition 4. True beauty results from that repose which the mind feels when the eye, the intellect, and the affections, are satisfied from the absence of any want.” *Grammar*, 5. Proposition 13 以降にある「一般原理」の中の色彩に関する部分は、1852 年の *An Attempt to Define the Principles* においてすでに提示されており、各命題についての考察や解説が加えられている。各命題は簡潔に書かれており、必ずしも論理的に全体が構成されていないため、これらの命題の理解には、ジョーンズが具体的に観察と分析を行った建築や装飾物の実際を理解することが必要であると思われる。

[30] Jones, *Designs for Mosaic Pavements* 参照。この書籍にあるタイルについての説明は、F.O. Ward によるものである。Ward が最も優れた人工タイルとして紹介するのは、陶磁器の粉を高圧で固めた“compressed porcelain tesserae”である。

[31] Penrose 及び Imediegwu 参照。

[32] Lu, “Decagonal and Quasi-Crystalline Tiling in Medieval Islamic Architecture.”および NATURE, “Islamic tiles reveal sophisticated maths.”参照のこと。

[33] Flores は *Owen Jones. Architect* の中でジョーンズの姉の書簡に言及しているが、引用はなく National Library of Wales の図書館員であった Geraint Phillips からの書簡によって情報を得ている。Geraint Phillips は Owen Jones Sr の伝記作者であるがウェールズ語によるものである。

[34] ドレッサーについては、注 6 参照。ジョーンズの *Examples of Chinese Ornament* にある陶磁器からの図柄は、ジョーンズが専属の室内装飾デザイナーとして働いた Alfred Morrison の収集物からのものが多く、『装飾の文法』にある「命題」による中国の図柄の説明も登場するが、『装飾の文法』とは異なり出版等の資金は豊富であったと推測できる。18 世紀以降の陶磁器の図柄からのデザインが多い。

＜参考文献＞

The Annual Register, for the Year 1874. “Obituary.” London, 1875, 149.

Arnold, Matthew. *On the Study of Celtic Literature.* London, 1867.

The Builder: An Illustrated Weekly Magazine, for the Architect, Engineer, Archaeologist, Constructor, Sanitary Reformer, and Art-Lover. ed. George Godwin. Vol. 32, No. 1631, May 9, 1874. “The late Mr. Owen Jones.” London, 1874. 383-385.

The Cambro-Briton. November, 1821-June, 1822. Vol.3 London, 1822.

A Catalogue of the Articles of Ornamental Art, in the Museum of the Department. London, 1853.

A Catalogue of the Museum of Ornamental Art, at Marlborough House, Pall Mall. Ed. Robinson, J. C. part 1. London: 1856.

Cook, Simon. “Owen Jones as a Book Cover Designer.” *The Victorian Web*. n.d. 2016. https://victorianweb.org/art/design/books/cooke18.html 20241201

Croft, H. J. *Guide to Kensal Green Cemetery*. London, 1881.

Dictionary of National Biography. Ed. Sidney Lee. vol. 30. New York: 1892.

Eliot, George. *The Essays of “George Eliot” Complete*. Ed. Nathan Sheppard. London, 1883.

---. *George Eliot’s Life as Related in her Letters and Journals*. 3vols. Ed. John Walter Cross. London, 1895.

Flores, Carol A. Hrvol. *Owen Jones, Architect.* PhD. Thesis, Georgia Institute of Technology, 1996.

---.*Owen Jones: Design, Ornament, Architecture, and the Theory in an Age of Transition*. New York: Rizzoli International Publications, 2006.

Frankel, Nicholas. “The Ecstasy of Decoration: *The Grammar of Ornament* as Embodied Experience.” *Nineteenth-Century Art Worldwide* 2. No.1, 2003, 16-38.

Hhys, Guto. “Grave elegies: three and a half centuries of Welsh poetic tradition.” *Kelten* 79, 2019. https://kelten.vanhamel.nl/k79-2019-rhys-literature-welsh-poetry-inscriptions

Hoskins, Lesley. “Jones, Owen.” *Oxford Dictionary of National Biography* online. 2016.

Imediegwu, Chikwesiri et.al. “Mechanical characterization of novel aperiodic lattice structures.” *Materials & Design*. Vol. 229, May 2023. https://doi.org/10.1016/j.matdes.2023.111922 20240202

Jones, Owen. *The Alhambra Court in the Crystal Palace*. Historical Notice by Pascal De Gayangos. Crystal Palace Library. London, 1854.

---. *Designs for Mosaic Pavements*. With an Essay on Their Materials and Structure by F. O. Ward. London, 1842.

---. *Examples of Chinese Ornament*. London, 1867.

---.*The Grammar of Ornament*. London: Day and Son, 1856. [McGill University Library, and New York Public Library]

Jones, Owen and George Scharf. *The Greek Court Elected in the Crystal Palace*. Crystal Palace Library. London, 1854.

Jones, Owen and M. Jules Goury. *Plans, Elevations, Sections, and Details of the Alhambra*. Historical Notice by Pascal De Gayangos London, published by Owen Jones, vol. 1, 1842.

Jones, Owen, Joseph Bonomi and Samuel Sharpe. *Description of the Egyptian Court; Erected in the Crystal Palace.* Crystal Palace Library. London, 1854.

The Literary Panorama. "Biographical Memoirs." New series vol.1, London, 1814, 965-966.

Lu, Peter J. and Paul J. Steinhardt. "Decagonal and Quasi-Crystalline Tiling in Medieval Islamic Architecture." *Science*, 315, 1106, 2007. DOI: 10.1126/science.1135491 20250202

The Monthly Magazine, "Marriages and Deaths in and near London." vol.38 part2 for 1814. London, [1815]. 378-379.

Oxford Dictionary of National Biography. Online edition. https://www.oxforddnb.com/ 20240128

Penrose, Roger. "Pentaplexity: a class of nonperiodic tilings of the plane". In: *Math. Intelligence*r 2.1 (1979/80), pp. 32–37. url: https://doi.org/10.1007/BF03024384.

Phillips, Geraint. "Jones, Owen [pseud. Owain Myfyr]." *Oxford Dictionary of National Biography* online. https://www.oxforddnb.com/ 20250104

Sessional Papers Read at the Royal Institute of British Architects. 1875-76. "Proceedings at the Ordinary and Other General Meetings, Papers Read, &C." London, 1876.

Thomas, Daniel Lleufer Thomas. "Jones, Owen (1741-1814)". *Oxford Dictionary of National Biography*. Ed. Sidney Lee. London, 1892.

Transactions of the Cymmrodorion, or Metropolitan Cambrian Institution. vol.1. London, 1822.

Turner, Olivia Horsfalll. *Owen Jones and the V&A: Ornament for a Modern Age.* .London: Lund Humphries, 2023.

Wroth, Warwick William. "Jones, Owen (1809-1874)" *Oxford Dictionary of National Biography*. Ed. Sidney Lee. Vol XXX. London, 1892.

＜Web 資料＞

Bagot History Com, “Bagot Pool Park and Pool Park Hall.” 20250104
http://baggetthistory.com/pool_park_data.html

BBC Wales history, “society and culture.” 20250104
https://www.bbc.co.uk/wales/history/sites/themes/society/language_education.shtml

The British Museum. “print; playing-card.” Published by De La Rue, After Owen Jones.
https://www.britishmuseum.org/collection/object/P_1896-0501-990 20241230

The Crystal Palace Foundation. http://www.crystalpalacefoundation.org.uk/ 20251025

Encyclopedia Britannica, Vol. 15 1911, “Owen Jones (architect).” Wikisource.
https://en.wikisource.org/wiki/1911_Encyclopdia_Britannica/ 20241231

Furniture History Society, “Jackson & Graham (1836-1885)”
https://bifmo.furniturehistorysociety.org/entry/jackson-graham-1836-40 20250106

Owen Jones (architect), Kensal Green Cemetery. 20250125
File:Owen Jones (architect), Kensal Green Cemetery 01.JPG - Wikimedia Commons

NATURE. “Islamic tiles reveal sophisticated maths.” by Phillip Ball. 22 Feb. 2007.
https://www.nature.com/news/2007/070219/full/news070219-9.html 20250202

The New York Public Library Digital Collections.
https://digitalcollections.nypl.org 20250125

Sir John Soane’s Museum, Collection, “Design for a plaque to Owen Jones.”
https://collections.soane.org/THES76985 20250204

Street Check, “Area Information for Llanfihangel Glyn Myfyr, Corwen, Wales”
https://www.streetcheck.co.uk/postcode/ll219uf 20250103

The World Playing Card. “59: Owen Jones (1809-74) and De La Rue.” 2025. 20250228
https://www.wopc.co.uk/blogs/kenlodge/59-owen-jones-and-de-la-rue

---. “Owen Jones: his work and his legacy—Part One, Part Two, Part Three.” 2023. 20241230
https://www.wopc.co.uk/uk/owenjones/owen-jones-his-work-and-his-legacy-part-one